



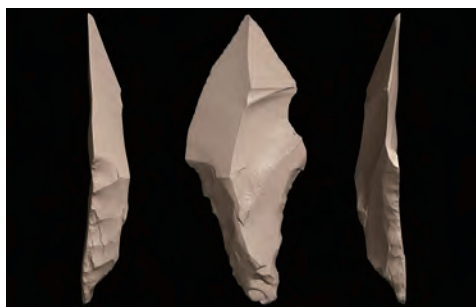
# omnividens

【オムニヴィデンス】



## 山形県新庄市上ミ野 A 遺跡の石器

上ミ野 A 遺跡は新庄市西部の河岸段丘にある後期旧石器時代の遺跡で、2000年に東北大学で3回目となる発掘調査をおこないました。写真はそのように出土した石器類で、ナイフ形石器、彫刻刀型石器、エンド・スクレイパー、サイド・スクレイパー、ノッチ、石刃、石核です。石器の材質は、多くが珪質頁岩で、黒曜石や玉髄も用いられています。年代は放射性炭素測定により約2万8千年前のものと判定されました。これらの石器は、東北地方にありながらも西南日本の石器の特徴を備えており、当時の人類活動を考察する上で重要な資料となっています。下は石器のCTスキャンのデータを用いた3次元コンピュータグラフィックスで、石器の加工痕を詳しくみることができます。写真：菊地美紀





## 追悼・北杜夫 どくとるマンボウ昆虫展@東北大学

開催期間：2012年4月28日(土)～6月17日(日)

展示会場：東北大学総合学術博物館(理学部自然史標本館) 展示室1階および2階



どくとるマンボウ昆虫記に登場する昆虫の実物標本を文章とともに紹介したコーナー

東北大学医学部出身の作家である「どくとるマンボウ」こと故・北杜夫は、幼少の頃から昆虫採集に傾倒し、著作に数多くの昆虫を登場させてきました。なかでも自身の昆虫にまつわる体験や観察をもとに描かれたエッセイ『どくとるマンボウ昆虫記』(1961年)には、チョウ・トンボ・バッタからミ・シラミにいたるまで185種の虫たちが現れます。昆虫に対する深い洞察と愛情、独自の自然観をユーモアたっぷりに著した文章は、昆虫ファン必読の書であり、いまでも子どもから大人まで広く親しまれています。

「どくとるマンボウ昆虫展」は、日本昆

虫協会の新部公亮氏が主体となって企画立案され、2008年より日本各地を巡って展示されています。晩年の北杜夫と新部氏とは家族ぐるみの深い交流がありました。2011年10月に84歳で北杜夫が亡くなって以降も、その追悼の思いを込めて継続開催されています。このたびの東北大学での展示会「追悼・北杜夫 どくとるマンボウ昆虫展@東北大学」も新部氏の提案で企画されました。

この「どくとるマンボウ昆虫展」の展示では、『どくとるマンボウ昆虫記』に登場する昆虫のほぼ全種類(185種中183種)

を、作中の文章とともに紹介しています。全20章からなる『どくとるマンボウ昆虫記』の各章をそれぞれひとつの標本箱で表現しています。これらの標本箱仕立ての展示物は新部氏の制作したもので、文学と自然科学を融合させた見事なアイデアとなっています。新部氏は少年時代に『どくとるマンボウ昆虫記』を読んで感動し、本に登場する昆虫を全部集めてやろうと密かに心に誓ったそうです。それから40年を経て、その夢を「どくとるマンボウ昆虫展」という形で実現させたこととなります。

展示品には他に、北杜夫自らが採集した標本や、実際に使用していた採集用具もあります。北氏が採集した標本のなかには、著作のなかで記述されたそのものの標本であると判明したものが含まれており、文学史的にも貴重な資料となっています。また、父 斎藤茂吉の短歌と北杜夫の文と昆虫標本とのコラボレーションを成した額装の展示品や、北杜夫の自筆原稿や自筆色紙、北氏の少年時代から晩年までの写真、昆虫愛好家の友人たちとの親交をしめす手紙など、多様な資料も展示することができました。北氏の面影と、北氏の周囲で昆虫がとりもつ縁を感じつつ、氏が生涯愛し続けた昆虫たちの世界にふれることのできる展示会でした。今回はさらに東北大学の特色を加えるため、『どくとるマンボウ青春記』(1968年)に描かれた東北大学や仙台のようすもあわせて紹介しました。



左からそれぞれ「まんぼう、憶い出を語る」、「虫と百態」、「変ちくりんな虫」の章を表現した標本箱(新部氏制作)。標本と文章がバランスよく配置され、配色にも気配りがされている。



北杜夫が使用していた採集用具



斎藤茂吉の短歌と北杜夫の文と昆虫標本とのコラボレーション。版画は廣田日出樹氏、書は岩淵美樹氏、選歌および昆虫イラストは新部元暉氏による



北杜夫自身により採集され、著作の中で記述された標本。たとえば、どくとるマンボウ青春記に、最上川の河原で父 斎藤茂吉が作歌する傍らで狩猟蜂を観察したという場面があるが、まさにその際に採集した狩猟蜂の標本が残されている（左下）。

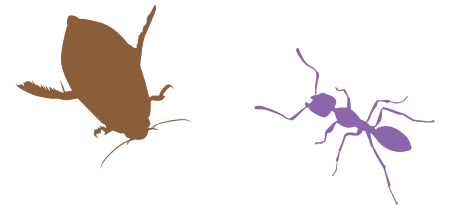


展示品を解説する新部公亮氏

関連行事として、5月3日(木)に新部公亮氏によるギャラリートークを展示会場にて開催しました。北杜夫の親しい友人であり昆虫にも詳しい新部氏ならではの奥の深いお話を、実際の展示標本を見ながら解説していただきました。

また6月2日(土)には、北杜夫のご息女でエッセイストの斎藤由香氏による講演会を理学部キャンパス大講義室で開催しました。歌人 斎藤茂吉とその妻・斎藤

輝子、次男・北杜夫といった才気と個性あふれる斎藤家の人びとの知られざる逸話を、貴重な映像を交えて、ご自身の経験をもとにお話していただきました。参加者は約260名で盛況となりました。斎藤由香さんや北杜夫氏の代表作の書籍販売もおこない、講演後に開催した斎藤由香さんのサイン会にも多くの方が参加されました。



主催：日本昆虫協会、日本アンリ・ファープル会、東北大学総合学術博物館  
協力：齋藤喜美子、軽井沢高原文庫、世田谷文学館、東北大学史料館、東北大学附属図書館 医学分館（敬称略）

展示パネル類のデザインや昆虫シルエットは学生スタッフの静谷あてな氏の作



往年の北杜夫の写真などを展示したコーナー



斎藤由香氏の講演のようす

# ヒトと人間と生物多様性と ～ゼンケンベルク自然史博物館～



東北大学  
学術資源研究公開センター  
(総合学術博物館) 助教  
**小川 知幸**

**PROFILE**

(おがわ ともゆき)  
1970 年生まれ  
専門：ヨーロッパ中世・  
近世史、資料論、  
出版・メディア論

## 並木道を抜けて

フランクフルトでゲーテ・ハウスやレーマー広場、シュテーデル美術館の市内巡りに飽きたなら行ってみるといい。中央駅をでて、北西に向かって 20 分ばかり歩いていくと、高層階のビルのふもとに広大なプラタナスの並木道がみえてくる。ほどなくしてそのかわらに瀟洒なたてものが姿をみせる。ドイツで第 2 の規模を誇る自然史博物館、ゼンケンベルクである。

たてものは 1907 年に竣工し、大改修ののち 2003 年に再オープンしたが、赤い砂岩を積み上げた外壁、大理石をふんだんに使った内装は当時の佇まいを彷彿とさせる。そして内部に行くにしたがって標本展示は、まさしく最新のものになっていく。

## 巨大化石の群れ

エントランスから「化石の道」と名づけら



ゼンケンベルク自然史博物館の正面玄関

れた発掘現場を模した通路を抜けていくと、まずは巨大な化石が視界に飛び込んでくる。ティラノサウルス、トリケラトプス、エドモントサウルス、ラムフォリンクス(翼竜)などである。カモノハシ竜のエドモントサウルスは、ミラ化して発見されたというめずらしい標本だ。

なかでも看板は、1990 年にアメリカのサウスダコタ州で発見され、2000 年にシカゴで初公開されて話題になった「スー」という名のティラノサウルスである。発掘者

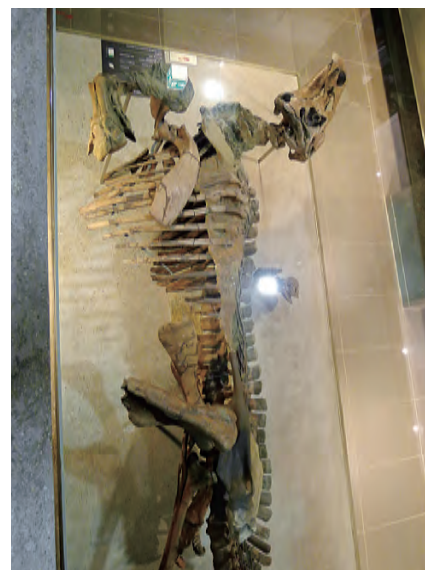
のシーズンにちなんでそう呼ばれた化石は、全身の約 80% の骨格が発見された最初のティラノだ。

それまで一体の化石といっても骨格の 46% しか見つかっていなかった。つまり以前のティラノの姿は半分以上が想像上のものだったのだ。標本はレプリカだが、現在の研究の画期となった恐竜化石といっ

ていい。さらに先の部屋には、クジラとゾウ(マン



ティラノサウルスの「スー」(レプリカ)



エドモントサウルス



ナガスクジラ骨格標本



クジラの脳レプリカ標本



ナガスクジラの心臓標本



鳥類コーナーの展示

モス)の多数の骨格標本があつめられ、見る者を威圧する。ナガスクジラの標本は、雄々しいその巨躯を勝ちほこるように壁面を覆い尽くしている。

### クジラとヒト

しかし、おや、と思うのは、骨格とならんでクジラの脳や心臓、胎児の成長をしめす標本までがなまなましく展示されていることだ。

なぜクジラだけ脳なのだろうか。現生のほ乳類ということもあるだろう。だが、知能の発達を脳のサイズで測る向きもある。たとえば、オスのマッコウクジラの脳重量は7,820グラムに達するという。ヒトの平均1,500グラムのおよそ5倍である。

ただし、マッコウクジラは体躯も巨大で、体重はヒトの500倍にあたる。したがって体重に占める脳重量の割合は0.02。これに対してヒトは2.10で、ひときわ脳の重い生物種なのである。

かつてダーウィンが『種の起原』によって打ち崩したのは、種の支配者としての人間の地位であった。クジラだけを

特別視するならば、ダーウィン以前の関係を、たんに「さかさま」にしたにすぎないだろう。

### ヒトが人間たるゆえん

では、ヒトが人間たるゆえんは何なのだろうか。ひとつには、種の支配者ではなく、観察者となったことである。この自然史博物館には、地階から3階まであわせておよそ6,000平米の広さの展示室に、世界中からあつめられた5,000点をこえる動植物の標本が並べられているという。部屋いっぱいの何十台もの陳列ケースにおさめられた、ありとあらゆる種の標本を目の当たりにすると、ノアの方舟かくありなん、とおもう。

そしてもうひとつは、恐竜化石の部屋のかたすみに設けられていた、古代エジプトミイラの小さな展示コーナーでふと足を止めたときに気づいた。

そこには、発掘の科学的成果を説明する写真パネルや、「死者の書」など当時の信仰の解説文とともに、かつての愛猫であった小さなミイラや、まるで眠るかのように静かに横たわる2体の人間の子どものミイラが、おごそかに展示されていた。

ヒトが人間たるゆえん、それは愛する死者の永遠をねがう心である。

※クジラの脳重量比のデータは、河島基弘(2011)『神聖なる海獣 なぜ鯨が西洋で特別扱いされるのか』ナカニシヤ出版の記述を参照した。



ネコのミイラ

## 大学博物館等協議会 2012 年度大会および第 7 回博物科学会に参加しました

2012 年 6 月 21 日(木)・22 日(金)の両日に、京都大学百周年時計台記念館と京都大学総合博物館を会場として標記の大会・学会が開催され、東北大学総合学術博物館から館長の柳田俊雄、佐々木理、小川知幸、そして事務の佐藤孝志の 4 名が参加しました。

初日は、百周年時計台記念館 2F 講演室を会場として、京都大学理事・副学長の祝辞にはじまり、来賓の文部科学省研究振興局学術機関課の挨拶をいただいたのちに、「大学博物館の原点」と題したシンポジウムの講演がおこなわれ、論点開示のあと、パネルディスカッションにはいりました。

学術審議会より 1996 年に出された答申、「ユニバーシティ・ミュージアムの設置について」から数えて 16 年、また、大学博物館等協議会の発足より 13 年目を迎えた本年度にあつて、大学博物館というもののある方と今後の発展を見据えながら、あらためてその原点を問うという試みは、主催館である京都大学総合博物館の大野照文館長の巧みな司会術とあいまって、フロアからも活発に意見が出され、予定時間をこえて白熱した議論となりました。

2 日目は京都大学総合博物館 3F 講演

室と 1F ロビーをおもな会場として、博物科学会の研究発表とポスターセッションがおこなわれました。今回は口頭発表が 12 本、ポスター発表が 11 本と、例年にくらべて少なめに抑えられていましたが、そのぶん各個の質疑応答に十分な時間を割くことができ、それぞれの研究を媒介とした参加者同士の関係が、いっそう深められたようにおもいます。

ポスターセッションのコアタイムには、本館より参加した佐々木が、「高解像度 X 線 CT による微小標本のためのデジタル標本システム」と題した報告を研究代表者として発表しました。この機器の一部は、理学部自然史標本館のエントランスに「オープンラボ」のようなかたちをとって設置しています。機器に触れることはできませんが、作業のようすと研究成果はポスター等で観覧することができますので、来館のさいにご覧ください。

小川は、「地図を読むーオルテリウスの『世界の舞台』ー」と題した発表をおこないました。近代の地図帳のはじまりと、そこでの地図のふしぎな描かれ方を紹介したもので、芸大教授や美術史、歴史研究者など、さまざまな方の関心を集めたようでした。

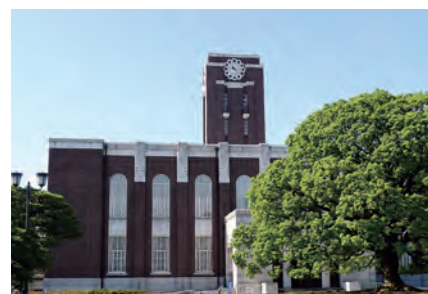
午後は京都大学総合博物館の見学会として、各種展示や収蔵庫の案内がおこなわれました。この博物館は、総面積 13,350 m<sup>2</sup>、展示面積 2,470 m<sup>2</sup>を誇る、日本最大規模の大学博物館で、上記答申の翌年の 1997 年に発足し、2000 年には南棟が竣工、2001 年に一般公開されました。シンポジウムの「原点」とは、京都大学総合博物館の 10 年の節目という意味もあったようです。

ともあれ、ここでは 260 万点におよぶ学術標本資料をあつめた巨大な収蔵庫にささえられた、自然史系・文化史系のあわせて 15 セクションの展示が常時開かれています。収蔵庫見学は、その充実ぶりと広大さで、多くの参加者に溜め息をつかせたようです。

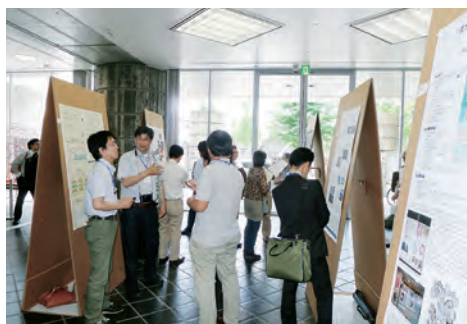
その後、百周年時計台記念館 1F で、大学の歴史展示室を見学しました。施設は広く、学史の展示も立派でしたが、私たち総合学術博物館であれば、学生や一般市民や教職員等のために、より充実した本学の歴史展示を作れるだろうという感想を抱いたこともまた事実です。



京都大学総合博物館



百周年時計台記念館



ポスターセッション



博物館収蔵庫と標本 (上)



歴史展示室

## 福井県立恐竜博物館と協定を締結しました

平成 23 年 7 月 1 日より、総合学術博物館は福井県立恐竜博物館と連携と協力に関する協定を締結しました。この協定では、地質学、古生物学などの理学の教育・研究の推進と、学問的成果の社会への広報と普及を両博物館で連携・協力して推進することを目的としています。この協定にもとづき、平成 24 年 2 月 7 日～ 3 月 25 日に仙台市科学館を会場として開催された「東北大学総合学術博物館のすべて XII 復興、南三陸町・歌津魚竜館—世界最古の魚竜のふるさと」展において、福井県立恐竜博物館所蔵のフクイラプトルの展示にご協力いただきました。また、当館の客員教授が福井県立恐竜博物館に滞在し、日本産の恐竜に関する共同研究（「日本と中国のティタノサウルス形類竜脚類の比較研究」東北大学学術資源研究公開センター・呂君昌客員教授）もおこなわれました。

今後も、福井県立恐竜博物館との共催展示、シンポジウム、講演会、共同研究を活発におこなっていく予定ですので、ご期待ください。



東北大学総合学術博物館と福井県立恐竜博物館との協定書



「東北大学総合学術博物館のすべて XII 復興、南三陸町・歌津魚竜館—世界最古の魚竜のふるさと」展におけるフクイラプトルの展示（仙台市科学館にて展示）

## 呂君昌客員教授の紹介

中国地質科学院地質研究所の呂君昌教授が、平成 24 年 2 月 16 日から同年 3 月 30 日まで総合学術博物館の客員教授として赴任されました。呂先生は、中国、日本、モンゴルなどアジア各地で翼竜やティタノサウルス形類竜脚類の発掘調査をおこない、それらの系統学的研究を進めています。今回、呂先生は福井県立恐竜博物館と共同で、フクイティタンなどの日本産ティタノサウルス形類の系統学的研究をおこない、アジア圏のティタノサウルス形類の移動や進化の研究をおこないました。



東 北 大 学 総 合 学 術 博 物 館  
I n f o r m a t i o n



予告：企画展「氷河期の人類—石器と遺跡からみる仙台と韓国光州」

近年、韓半島南部の全羅道では、約1万～10万年前までの旧石器時代の遺跡が續々と発見され、当時の古地理と古環境のもとで人類がどのように活動していたのかが、しだいにあきらかになってきています。また、仙台市でも同様の遺跡が発掘され、約2万年前の氷河期の環境や人類の活動のようすがわかってきました。

企画展は、仙台市と韓国光州広域市との国際姉妹都市提携10周年を記念して、東北大学が調査した約2万～2万5千年前とされる山形県新庄市の上ノ野A遺跡、大分県豊後大野市の岩戸遺跡、仙台市が調査した山田上ノ台遺跡等の旧石器(剥片尖頭器など)を、実物とパネル、そして最新のCTスキャンデータを用いたCGを展示します。また、朝鮮大学校博物館が調査した韓国の当該期資料をパネル等で紹介し、約2万年前の日本列島と韓半島の古環境と旧石器の類似性について考えます。

なお、会期中には記念講演等の関連行事も予定しています。

会 期：平成24年12月8日(土)～12月24日(月)

会 場：地底の森ミュージアム企画展示室

主 催：東北大学総合学術博物館、朝鮮大学校博物館、仙台市教育委員会、公益財団法人仙台市市民文化事業団



理学部自然史標本館

●ご利用案内

総合学術博物館の常設展示は理学部自然史標本館にて行っています。下記は理学部自然史標本館のご利用案内です。

●入館料

大人150円/小・中学生80円  
(団体は大人120円、小・中学生60円)  
幼児・乳児は無料、団体は20名以上です。

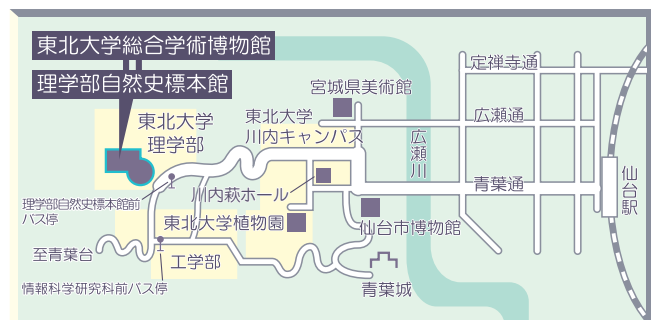
●開館時間

午前10時から午後4時まで

●休館日

毎週月曜日\*1、  
お盆時期の数日\*2、年末年始\*2、  
電気設備の点検日(例年8月最終日曜日)\*2

\*1 月曜日が祝日の場合は開館、祝日明けの日が休館となります。  
\*2 日にちが確定次第ホームページにてお知らせします。



●交通手段

- 仙台市営バス  
(1) JR仙台駅西口バスプール9番のりばより、「青葉通・理・工学部・仙台城跡南経由 動物公園循環(719系統)」に乗り、「理学部自然史標本館前」で下車。徒歩1分。所要約20分。
- (2) または同じく9番のりばより、「宮教大」行きが「青葉台」行き、「成田山」行き(710、713、715系統)に乗り、「情報科学研究科前」で下車。徒歩4分。所要約25分。
- 仙台市観光シティーバス  
「るーぶる仙台」も利用できます

総合学術博物館のホームページもご覧ください



東北大学総合学術博物館のホームページ  
<http://www.museum.tohoku.ac.jp/>

東北大学  
総合学術博物館  
THE TOHOKU UNIVERSITY MUSEUM

〒980-8578  
宮城県仙台市青葉区荒巻字青葉6-3  
tel/fax. 022-795-6767  
©The Tohoku University Museum

Omnividens  
[オムニヴィデンス]

Omnividensはラテン語で、英語のall-seeingに相当し、「普く万物を観察する、見通す」の意味をもっています。